終戰の日に思ふ

市川　浩

平成二十六年八月十五日（金）晴

加藤淳平幹事「文語の苑 文語詩」を編み給ふ。小生その版下體裁の設計制作に加はる。明治以降の詩が對象なれば、詩人により主張の、夫々の體裁を忠實に再現するを要すと云々。更に語の意味、評釋の插入などもあり、複雜の構成を統一的に設計せむとし、入集の詩を數多按試す。年ごろ詩など讀むこともなかりしかば、作業に伴ひて目にするのみなるに、さすが兄の撰する文語詩、無意識の内に我が腦の琴線を動かし始む。與謝野晶子の夭折せる薄倖の姉を悼む「鼓いだけば」、佐藤春夫の失戀の中に嘗て一時の團欒を思ひ起す「秋刀魚の歌」、齋藤茂吉の講和條約發效による獨立恢復を祝ふ「日本のあさあけ」等、謂はゆる文學青年ならずとも、愛唱せる高校生も多かりけむに、この歳にてとの感懷を覺ゆ。其の中に折口信夫の「海の幻」あり。

以前本ウエブサイト「文語の苑・詞藻樓」にて、精神科醫、故飯田眞氏の「折口信夫口診斷・日本人」（一～六）を上架す。信夫の民俗學は祖父の里大和と、師と仰ぐ柳田國男の奬めにより大正十年調査に旅行せる沖繩とが原點にして、この調査研究は昭和四年「古代研究」として結實すと記す。

青き海と共に、日本古代文化の生き證人たるが明かとなれる、その沖繩は、大正九年に漸く縣制を布くも、先の大戰にて米軍の占領する所となり、昭和二十八年歿の信夫は本土復歸の豫兆さへ目にする能はざりけり。「海の幻」は嘗て調査に訪れぬる沖繩に思ひを馳せつゝも、最早取返しのつかぬ絶望感をば、沖繩戰に散華せる我が荒鷲の鎭魂に寄そへて詠ふ。

冒頭にいふ「われ竟に　かくの如きか　我つひに　空しく老いて　かくながら　命終へなむ―」と。「命終へなむ」は「終ふ」が未然連用同形のハ行下二段動詞なれば孰れに讀むべきか、高校文語文法の難問なるも、終戰後六十九年を歷てこの詩に接したる小生は未然形に讀み、「今はこれまで」と矢彈盡くる武士の長として命を終へむと欲する信夫の氣持に切實の思ひを抱きけり。

當時中學初年級の我等、將に喪はれむとする日本文化の殘映を記憶する最後の世代なり。昭和二十年の前後一二年の間、世界に誇る我が中等教育掉尾の光芒を放てる學窗にありて、默々とされど熱烈に「日本」を傳へむと、生意氣盛りの生徒らを指導し給ひける先生方の御導きにや、今日國語の再生を期する文語の苑、國語問題協議會にこの世代齒八十を超え多く集ふの不思議あり。

但し我等が活動なほ未だ世人の關心を惹くに至らず。殆どが我等が後代なる「世人」我等に共鳴せざるは、共鳴に要する共通にして固有の文化振動數の傳承なきが故にあらずや。「海の幻」の絶望は戰前の信夫の業績あり、同四十七年には沖繩の返還ありて和ぐを得たりと言ふべし。戰後の復興にかまけて、傳承を忘れし我が絶望は何によりてか和がむ。

海の幻

折口信夫

しづかづかなる朝明に起きて
床の上に　大き　吐息す―。
　われ竟に　かくの如きか
　我つひに　空しく老いて
　かくながら　命終へなむ―

庭の面になびかふ霧の
ほのぼのと　たゞよふ上に
　紫陽花の　碧き
　澄み澄みて　深海の色―…
　　見つゝ　我が心ぞ疼む

みむなみの琉球の海の
沖縄の遠き空より
かへり來し　洋の記憶―。
　大洋の波に　穿けたる
　航空路の氣孔の青さ

人知らで　洋中に
渦潮ぞ　鳴りめぐる―。
　旋り澄む青一處
飛行機は　そこにおちいる…。
　　瞬間に見し　あぢさゐ―

たゝかひのなかりし時の
沖縄の海のまぼろし―。
　戰ひにやぶれし國の
　さすらひの　老いのこの身に
　　とり返すものともあらぬ
　　―青きまぼろし